

好井裕明著 『「今、ここ」から考える社会学』 ちくまプリマー新書 (2017年)

「社会学とはいったいどのような営みなのか」、本書の冒頭で著者が述べた一文である。実際、社会学の研究は非常に多岐にわたっており、家族、地域、教育、産業、労働、政治・・・その多様性は他に類をみない。ただし、著者はいずれの領域においても社会学が対象とするものは「他者との出会い」「他者と共にある私」であるとする。ここで冒頭の問いに対し、「社会学とは他者の学である。社会学とは他者を考え、そこから私という存在を考え直す学である。」という本書の立ち位置が決まる。

そして、他者の学たる社会学を考えるにあたり、1章では、「社会を考える6つの視点」として M. ウェーバー、G. ジンメル、E. デュルケーム、J. H. ミード、A. シュッツ、H. ガーフィンケルという社会学を代表する学者の視点が示される。それぞれに「行為」「関係性」「構造」「自己」「日常世界」「人々の方法」の6つであるが、小難しい学術書のように詳細に研究を論じるのではなくエッセンスを簡単に紹介しているため、はじめて社会学に触れる人でもわかりやすいものになっている。

2章以降は1章で示された視点をベースとして、「教育」「スマホ」「LGBT」「差別・排除」「環境」「政治」といった著者の関心領域を社会的に読み解いていく。例えば2章では、最近耳にすることの増えた学校内での序列を示す“スクールカースト”について、映画『桐島、部活やめるってよ』（吉田大八監督、2012年）のストーリーをもとに、その実態を描き出していく。また、3章では今やあたりまえの日常となった“スマホ”について社会的な意味でのツールとしての役割を示し、4～5章では「らしさ」や「ちがい」に焦点をあてLGBTや障がい者への意識や接し方、マイノリティとマジョリティの考え方などについての検討が進んでいく。さらに、6章では環境問題について過去の公害事件などを生活者の目線から追いかけていき、最後の7章では18歳が選挙権を持つ現在の教育現場における政治教育のあり方を通して「政治的であること」について論じている。この7章においては、自分と関係のない多くの他者のリアルについて想像力をもって考えることで、それら他者の視点から自分を見ることができ、自分がよりクリアになっていくことが指摘されている。このような他者から見る自分という視点は今の社会で不足しがちなようにも感じられるところであり、本書は多くの人がこのような視点を見つけるためにも役立つ一冊といえよう。

そして、本書で社会学に興味をもった方は、著者が以前に書いた『「あたりまえ」を疑う社会学—質的調査のセンス—』（2006年）や『違和感から始まる社会学—日常性のフィールドワークへの招待—』（2014年、いずれも光文社新書）の2冊も参考にしてもらいたい。社会的な視点から社会をみることで、これまでにはなかった“気づき”を得られるかもしれない。

(加藤 健志)